

SANTA TACHI-NO NATSU

サンタ達の夏



EMIT7C

1 章

あこがれの小麦色

サンタノフスキー達は、サーモンの干物をしゃぶりながら
ホノルル国際空港のロビーに降り立った。



荷物受け取り所でそれぞれ思い思いにサンタ袋を受けとると、「サンタ御一行様」という旗を持つガイドを見つけ、ゾロゾロと集まった。

遂に来た、ワイハ。サンタ組合が、今年の慰安旅行をワイハにセッティングしたのだ。

去年までは、毎年地元のサーモン食べ放題ツアーだった。いつかはワイハへ。そう思いながら、毎年毎年しょっぱい思いで、しょっぱいサーモンを噛み締め続けてきたのだ。

そして今年。

スウェーデン西地区担当のサンタントスなどは、ハワイ用にウキウキ気分でグンゼのTシャツを購入。そして人生初の半袖を我慢しきれず、自宅で試着。隣の家のサンティスに自慢しに行ったことで、風邪を引いてしまい、この旅行を欠席した。

今、サンタノフスキーが着ているグンゼのTシャツの肩の部分には、サンタントスの白ひげが縫い込まれている。サンタントスの思いと共に、ワイハに来たのだ。

ほぼ全員グンゼの白Tシャツを着てる中、ひとりだけヘインズの白Tシャツを着てるサンタがいる。

カルロス・ビョーン。

「コストカッター」の異名を持つ、サンタ組合の組合長だ。彼のおかげで、このワイハ旅行が実現した。

サンタ業は、グリーンランド裏社会の主要産業だ。一般人にとってサンタは、子供のいる家にプレゼントを置いていく存在として知られている。しかし、それだけではなく、しっかりと各家庭に盗聴器を仕掛けている。そしてその盗聴器から得る情報を売ったり、時には直接脅しをかけることお金を稼いでいるのだ。

「子供達に夢を、大人達に悪夢を」がサンタ業の鉄の掟だ。

しかし、年々儲けが落ちてきていた。最近のおもちゃのハイテク化により、プレゼント1個あたりの単価が上がり、儲けが出づらくなっていたのだ。

ビョーン氏は、プレゼントをiPadからiPedに、Nintendo DSからNintenbo DSに、変えることで大幅なコストカットを実現した。そのコストカットで出た利益で、ワイハに来れたのだ。



「おい、あれワイキキっていうんだぜ」

サンタの中で一番の物知り、トロント地区担当のサンチャックが指差すと、周りのサンタ達がワイキキの周りに群がった。

「うまそうだな」

ライスの上にハンバーグが乗り、その上に目玉焼きが乗っている、ワイキキというらしい料理に、全員が舌舐めずりした。



これから始まる3日間への期待が否が応にも高まった。

「出発しまーす」

ガイドの掛け声に気づいたサンタ達は、急いでリムジンバスに飛び乗った。

2章

疑惑の小麦色

バスと名付けられた8人乗りワゴンにサンタ24人が乗り込み、遂に慰安旅行がスタートした。

早速おつまみサーモンを取りだし、サンタ達の宴は始まった。

グリーンランドでは見たことがない風景が続く。

「おい、あれワイキキっていうんだぜ」

物知りのサンチャックが、1本の木を指差した。

針葉樹のみが木だと思って今まで生きてきたサンタたちは、上の方にだけ枝がついている、ワイキキという異様な形をした木を見た。

キモいといって嘔吐するサンタ、ツボにはまって爆笑するサンタなどが続出した。

この後、サンタ達は、このワイキキの木に生る、椰子の実というものの中身を飲むことになる。

バスは、赤信号で停車した。

隣の車線にでっかいリムジンバスが止まった。風景が見えなくなり、サンタ達は苛立った。そして、モスクワ東地区担当の三太郎が重大な事実気づき、リムジンバスの中を指差して叫んだ。

「おい！あれIKEAの連中だぞ！」

一瞬にしてサンタ達は殺気だった。

サンタとIKEAは抗争中の関係だ。欧米の北の方の覇権を巡ってサンタとIKEA、そしてNOKIAが三つ巴の争いを繰り返しているのだ。

つい先日、アイスランド地区担当のサントスが、自宅でIKEAの家具を使って巴投げの練習をしていた。家具を投げにかかったところ、急に重みがのしかかり潰されるという形で暗殺された。



この残虐な行為に、サンタ達の怒りが頂点に達していたのだ。

「おい！乗り込め！」

サンタ達は窓からワゴンを抜け出し、リムジンバスによじ登ろうとした。しかし、手についたサーモンの油で滑って、片っ端から滑り落ちた。

リムジンバスは何事も無かったかのように出発した。

サンタ達は、悔し涙でそれを見送った。

すぐにおつまみサーモンを仕込んだIKEAのスパイ探しが始まった。スウェーデン北地区担当、南地区担当に容疑がかけられた。

「今なら自首すれば許してやるぞ。」

カルロス・ビョーンはそう言い、自首を促した。

しばらく沈黙が続いた。

「ボクがやりました。」

南地区担当は自首した。

「よし、許してやる。北地区担当。お前は自首しなかったんでクビだ！！」

カルロス・ビョーンは、バリカンを取りだし、北地区担当の白ヒゲを剃りあげた。

「さあ、カメハメハの手下にでもなるがいい！」

北地区担当は、怯えながら逃げ出した。

残るサンタは23人。



3章

燃え上がる小麦色

サンタ23人は、バスを降りたことで全員が灼熱の太陽に晒されていた。



それを見たカルロス・ビョーンは思った。あまりにもメラニン色素が少なすぎる。不安げな表情を浮かべながら、彼はじっと見つめていた。

容赦なく降り注ぐ紫外線が、サンタ達のDNAをどんどん傷つけていった。IKEAに連中への怒りと悔しさでいっぱいなのは、その事に気づかずにいた。

擦り傷とかに効く軟膏とか用意した方がいいのだろうか。そう思いながら見つめ続けたカルロス・ビョーンは、彼らの白髭がバスの中で食べたサーモンの干物の油で光っていることに気づいた。そして、それがどれほど危険かに気づいた。

「マンモスやばい！」

カルロス・ビョーンは叫んだ。

だが、叫ぶか叫ばないかのタイミングで、カルタゴ地区担当サンタフィアの白髭が発火した！

「あれ？これ、、、これちょっと、マンモス熱い！」

サンタフィアは叫んだ。

サーモンの油が火の勢いをどんどん強めていった。そして、他のサンタ達の白髭も次々に発火した。

サンタ達はマンモス混乱した。

「髭をマンモス筆るんだ！急いで！」

カルロス・ビョーンは、そう叫んだ。

サンタ達は、燃え上がるお互いの白髭を全力で筆りあった。

そこは修羅場だった。

筆れば「ouch!」、筆らなければ「あちい!」。彼らはどちらかを選ばなければならなかった。

「筆ればouch、筆らずんばあちい。」

マーチ・オア・ダイ、進むも地獄引くも地獄と並ぶ、修羅場で使える便利な格言が出来た。

暑さに弱い生粋のグリーンランドっ子達は、全白髭を筆り尽くし、燃え上がる白髭が風に舞うのを放心状態で見つめた。

サンタ達がヒリヒリする皮膚にサーモンの油を塗り込み始めたその時、風に舞う白髭の一部がバスの中に入り込み、サーモンの干物に火を付けた。

火はバスの中の色々なものに燃え移り、あっという間にバス全体が黒煙をあげて燃え上がった。

「おい、あれワイキキって言うんだぜ」

物知りのサンチャックが燃え上がるバスを指差し、周りに教えた。



「やばい、逃げないと！」

運転手は、ものすごい勢いの火から逃げようと、思いっきりアクセルを踏んだ。

ギアがバック状態だった。

「あ」

バスは、後ろにいたサンタ20人とカルロス・ビョーンをパーフェクトに轢き切った。

残るサンタは3人。

4章

新入りの小麦色

残されたサンタは、沖の鳥島地区担当サンダム、南極地区担当サンターサンタギー、配属未定サンターライガーの3人だった。

3人は、あまりの事態にしゃっくりが止まらなくなった。サンダムのしゃっくりを止めないと。その一心で、サンターサンタギーはサンダムの後ろに回り込み、MIZUNOの金属バットを振り上げた。

たまたま視野が360度あったサンダムには、その様子が丸見えだった。

初めて見る金属バット。サンダムは、秋刀魚のように鈍く銀色に輝くその物体に興味を示した。

そして、360度に曲がる関節を駆使し、振り向きもせずに

金属バットに掴みかかった。

もみ合うサンダムを見て、サンダーライガーは持参のアイスクーラーの中から冷凍サーモン尻尾を取り、振り上げた。そしてそれを振り下ろした。



遠心力などの力を受け取った冷凍サーモンは、自らもつ重みをフルに活かし、スピードを上げ、背びれで空気を切り裂き、目を見開き、雄叫びをあげながらサンダムに襲いかかった。

サンダムは、眉の上辺りにある変な穴から、バルカン砲をピュッピュピュッと発射し応戦した。

なかなか飛距離が延びず、命中しなかったため、何度も何度も頭を前に振りながら発射した。

その結果、首の骨を疲労骨折し、息を引き取った。

戦いに集中しているうちに2人のしゃっくりが止まった。そして、あらためてこの惨状を何とかしないとけないと思ひ、走り出した。

サンタはほとんど足を使うことがない。一人前のサンタは、コンビニどころかトイレへ行くときでさえトナカイを足代わりに使うものだ。

そのため、サンタという生き物は極度の運動不足だ。2人も30mほどで汗だくになり、脱水症状を起こした。

見るに見かねたバスの運転手は、2人に向かって、「オレのバスに乗るんだ」と言った。

サンタ達は、何度も足をもつれさせながら、燃え上がるバスに向かって進んだ。

乗り込むのを見た運転手は、アクセルをベタ踏みした。何かを轆いたみたいだが確認している時間は無い。運転手は急いでバスを走らせた。

しばらくするとハローワークに到着した。

乗っていたサンターサンタギーはバスを降りた。そこで、サンタ22人とカルロスビョン募集の手続きをした。



サンターサンタギーは燃え上がるバスに戻った。乗り込むのを見た運転手と共に、バスは大爆発した。

半径100m近辺に、サーモンの破片が雨のように降り注いだ。

翌日、浅黒い肌のサモア系サンタ22人と、浅黒い肌のサモア系カルロスビョンが集まった。

22人となったサンタ達は、再び慰安旅行を再開した。

5章

もうひとつの小麦色

集合したハローワークの通路が狭かったので、カルロス・ビヨーンを含め、総勢23人のサモア系サンタ達は、すし詰め状態で縦1列に並んだ。

そして、そのまま先頭から順にハローワークを出て、慰安旅行に出発した。

ちょっとでも足の動きがずれると、前後の人に当たってしまう。曲がっても止まっても、ぶつかってしまう。

「周りに迷惑をかけては行けない。」そう子供の頃から親に教えられてきたサンタ達は、足が当たらないように、足の動きを合わせて真っ直ぐに歩き続けた。

3分ほど歩くと、砂浜にたどり着いた。

サンタ達はもうどうにもできず、まっすぐに海の中へと消えていった。

ここにサンタ達は滅亡した。



だが、滅亡したのは、一般的に知られているサンタだ。

サンタ組織には、あまり知られていない、対セコム特殊部隊というものが存在している。

この部隊は、監視カメラやセコムが入っているような、並のサンタでは侵入できない家庭に、プレゼントを届けるために作られた組織だ。

彼らは、事を隠密に進める。

常に10人単位の組織で行動する。

黒い全身タイツを着て闇に隠れながら、黒いセルシオに乗ってやって来る。



後方組は、デューク東郷も愛用しているM16にサイレンサーを着け、セコム職員や監視カメラ、そしてミッションの邪魔となる一般人を狙撃する役割を担う。

前線組は、セコムの増援を防ぐため、まずプレゼントを届ける家庭の電話回線やケーブルテレビなどの通信網を破壊する。一応、電気・ガス・水道のライフラインも破壊して孤立させる。

もし番犬がいた場合は、鍛え上げられた瞬発力を駆使して、吠えられるより早くジャーキーを与えててなづける。

そしてプラスチック爆弾で鍵と壁を破壊して侵入し、駆けつけた親を麻酔銃で狙撃。

その後、子供の部屋まで急いで突入し、子供が起きていたら射殺。

寝ていたらプレゼントのタムチンキパウダースプレーとサ

ンタ募集のビラを置いて脱出。

すぐにマフラーを外したセルシオに乗り込み、ヴィッツやマーチで追ってくるセコムを振り切る。

まさに、サンタの先鋭部隊なのだ。

彼らは日頃から厳しい訓練を行っているため、並みのサンタよりも慰安旅行を楽しみにしていた。

だが、今年のクリスマスに、海岸の岸壁沿いにあるセコムしてる家へのミッションで、参加できなくなる事態が発生してしまったのだ。

6章

晩酌小麦色

なぜ対セコム特殊部隊は、慰安旅行に参加できなくなったのか。それは、去年のクリスマスでの海岸沿いにあるセコムしてる家庭へのミッションが原因だった。

その日彼らは、各自夕飯と晩酌を済ませて20:00現地集合する予定だった。

だが、前線組のアルソックスは、面白いテレビ番組がやってなかったこともあり、早めに家を出て18:00頃到着してしまった。

仕方なく黒いセルシオを路駐させ、田原俊彦の『ハッ!としてgood』を思いっきり低音ブーストさせて爆音で聴いた。

しばらくすると曲が終わり『抱きしめてTO-NIGHT』が流れてきた。



アルソックスは何よりもこの曲だ大好きだ。

このミッションが終わったら、祖国グリーンランドの首都中心部にトシちゃんの銅像を建てる。

流れてる曲に合わせて思いっきり歌い上げながら、そう思った。

すると、ミッション先の玄関に坂川急便のお兄さんが大きな荷物を持って入っていった。

勘が鋭いアルソックスは、坂川急便がサンタより先にクリスマスプレゼントを渡し、サンタのお株を奪おうとしていることに気づいた。

坂川急便に職を奪われる。危機感を覚えたアルソックスは、トシちゃんの映像で覚えたムーンウォークを駆使して、チーターのようなスピードで坂川急便のお兄さんに襲いかかった。

だが、アルソックスはパパからもらったクリスマスプレゼントの上履きを履いてきたため、靴擦れを起こし、あと少しの所でかかとの皮がズル剥けになり、膝から崩れ落ちた。

それを見た坂川急便のお兄さんは、あまりの興奮に1秒5ステップのペースでカズダンスを踊った。

丁度その時、後方組のアルソッタ、アリソック、アルリックがそれぞれ黒いセルシオで到着した。

アルソックスがヤバイ。

そう思った3人は、坂川急便のお兄さんをM16で狙撃した。

坂川急便のお兄さんは、ステップをし続けながら、仲間へ危険をしたせる雄叫びをあげた。

「トウーールルルルルルルルルル!

トウーールルルルルルルルルル!」

宅配トラックがあちこちから現れ、坂川急便のお父さん、叔父さん、叔母さん、義理のお父さん、お祖父さん、義理のお祖父さん、息子、孫、義理の孫がアルソックス達を囲んだ。



アルソックス達と黒いセルシオ4台は、ギリギリと海岸の岩場に追いやられた

怒髪の小麦色

アルソックス達と、そして4台のセルシオは、じりじりと岩場の奥に追い詰められていった。

しばらくすると、残りの対セコム部隊が到着した。

彼らは坂川急便達を物ともせず、あっという間に後ろからごぼう抜きした。そしてアルソックス達と共に、じりじりと岩場の奥に追い詰められていった。

引き下がっていくうちに、脛のちぢれ毛や巻きヅメの隙間にワカメが絡み付き、段々と身動きが取れなくなっていった。

絡み付いたワカメを必死に振りほどこうともがいているうちに、アルソッタは気づいた。

ワカメが絡み付いて動けないと。

そして、口内炎を刺激しないように口をすぼめながら叫んだ。

「ワカメ酒が絡み酒で烏骨鶏night fever!!!」

「オーライ!」

近所に住むDJアルファックは、すぐさま烏骨鶏night feverを演出する選曲を自慢のレコードコレクションからチョイスした。

ちょっとした手違いで田原俊彦の『ハッとしてgood』がかかった。

アルソックスは俄然盛り上がった。

サビに近づく度にスクラッチをしてAメロに戻すという、DJアルファックお得意の狡猾な嫌がらせが、アルソックスの生き残っている数少ない毛根が奮起させた。そして、辛うじて怒髪天をついた。

その様子とは関係なく、坂川急便達は海風の水分でシナシナになったハリセンで襲いかかってきた。

ペシッペシッとハリセンのビートが爽快に響き渡り、このウコッケイnightがトシちゃんを中心に最高の盛り上がりになった。

全員がそれぞれの役割を果たしながら、最高の夜を味わっているその時、遠くから地鳴りのような雄叫びが聴こえた。

「トゥールルルルルル!!

トゥールルルルルル!!」

坂川急便の老若男女は、どこからか暴走してきた運送トラックに急いで飛びハコ乗りになり、ハリセンを振り回しながら雄叫びの方向に走り去っていった。

一気にその場は静まりかえり、トシちゃんの歌声だけが響きわたっていた。

その様子を遠くから伺っていたセコム達が、ライオンの食べ残しを漁るハイエナのようにやって来た。

セコム達は、身動きがとれないアルソックス達、セルシオ4台、DJアルファック、そしてワカメを、手垢で真っ黒になるほど使い込んだセコム標準装備の警棒風スリコギで、ボコボコ叩きまくった。

アルソックス達は、2011年に発売されたトシちゃんの新曲『さよならloneliness』が響きわたる中、段々と記憶が薄れていった。

油揚げは小麦色

気がつくときアルソックス達は、鍋の中にいた。

意識が朦朧とし、視界がぼやける中、ザクッザクッと何かを切る音を聞いた。

「あっはああん!気になる、気になるううう!!」

アルソックス達、そしてアルソックスのそっくりさん達は、そう思った。

次第に視界がはっきりし、音の主が見えてきた。

そこには、ものすごい形相でまな板の上の油揚げを見つめる男がいた。

アルソッタはその男を知っていた。

野獣系ネットアイドル大輔。

一部のケモノマニアから熱狂的な支持を得ている男だ。

「だめだこれでは。右から3番目の幅が他より2mm狭い。そして4番目も2mm狭い。いや、端から端まですべてが他より2mm狭い。またやり直した。」

大輔はそういい、油揚げで一杯になったポリバケツの中に、まな板の上のそれを投げ込んだ。

大輔は新たな油揚げの袋を開け、買ったばかりの刺身包丁を近づけた。

しばらく包丁を入れる場所を探り、最適の場所を見定めた。そして集中力を限界まで高め、目を見開いた。

「今だ!」

そう思い、一気に切ろうと、買ったばかりの刺身包丁の包装をひん剥いた。

だが、柄の部分が引っ掛かり、何度引っ張ってもうまく取れなかった。

アルソックスはその様を眺めながら、鍋の中に何度も何度も放尿をした。

しばらくすると、ガスコンロの火にかかった鍋からお湯が吹き出した。

「タイムリミットだ・・・」
大輔は油揚げを諦め、コンロのとは別の鍋から、水で戻していたふえるワカメを掴んだ。

ふえるワカメは、絡み付いたアルソックス達の重みで持ち上がらなかった。

鍋に入るまでのアルソックス達は、乾燥していたため、軽々と持ち運ぶことができた。

だが、鍋に入るや否や、アウトプット能力は無いものの、ものすごいインプット能力を備えた高性能の頭皮の毛根から、必要以上に鍋の水を吸収し、 $E=mc^2$ の公式通りにどんどん体重を増やしたのだ。

鍋から出すことができない事を悟った大輔は、ちょっとづつ入れるために、ワカメとアルソックス達をざく切りにしようと考えた。

そして、買ったばかりの刺身包丁を手に取り、その包装を剥がしにかかった。だが、どうしても柄の部分が引っ掛かって取れなかった。

その間にも鍋のお湯はどんどんと蒸発していた。

「だめだ」

大輔は刺身包丁もあきらめ、引き出しからバターナイフを

取りだし、ワカメとアルソックス達をざく切りにしようと、切りかかった。

その時、庭のほうから、ドスの効いた声でキャピキャピ騒ぐ音が聞こえた。

大輔とアルソックス達は、流し目で声の方を見た。

そこには、サイドミラーを羽ばたかせ、優雅に空中を旋回する、セルシオ4台の姿があった。

「セルシオ4台!」

アルソックス達は声を揃えてそう思った。

お隣の家ヘルシオが、旋回するセルシオ群れに、仲間と間違えて合流した。

しばらく旋回を堪能したセルシオ4台とヘルシオは、アルソックス達のピンチに気づき、救出のために突っ込んできた。

「ちょっと速すぎる。」

そう思ったセルシオ4台は、お互いのブレーキを踏んだ。

おかしい。止まらない。セルシオ4台はそう思った。セルシオ4台は、タイヤが止まっても空中では止まれないことをまだ知らなかったのだ。

セルシオ4台は、そのままものすごい速さで窓を突き破り、大輔とアルソックス達に突撃した。

大輔の白いスーツが血に染まった。

絶望の小麦色

セルシオ4台に追突された、サンタ組合の対セコム特殊部隊に所属するアルソックス達は、吹っ飛び、壁に叩きつけられ、地面に落ちたところでセルシオ4台に轢かれた。

そのせいか、チクツとした痛みを感じた。

また、アルソーニは、二週間搔かずに我慢した、湿疹がある手の甲の上をセルシオ4台のタイヤが擦って行ったため、快感が脳内を駆け抜けた。

ツバを付けとけば治るかもしれない。

そういう思いもよぎったが、段々と意識が薄れて来たため、救急車を呼ぶことにした。

だが、来た救急車には、赤と白の比率の問題で、乗ることができなかった。

サンタブランドは、赤と白の比率が7:3と厳密に決まっている。救急車は白が多すぎて、ブランドイメージを壊すので、乗ることが認められないのだ。

結局、怪我だらけの体を引きずりながら、コカコーラ社からロゴ入りの軽トラを盗み出し、それに乗って病院を探した。

人数分のベッドがあって、かつサンタブランドの色使いの病院。

いくら探しても、そのような病院は見つからなかった。

病院は見つからなかったが、コカコーラ社近くにあるラブホテル「サンタフェ」がその条件をみたした。

アルソックス達は、迷わずラブホテル「サンタフェ」に入院した。

置いてあるいくつかのコスプレ衣装の中に、サンタの衣装もあったので、退院時も安心だった。

楽しみにしていた組合の慰安旅行には参加できなかった。来年2月まで入院とのこと。

対セコム特殊部隊全員が入院してしまってるため、今年のクリスマスはセコムしている家庭にはサンタは行けない。

それだけではない。その他サンタ組合員も慰安旅行中にワイハで爆死したため、今年是世界中のどの家庭にもサンタが行けないのだ。

2011年12月25日朝、世界中の子供達が絶望の底に突き落とされることとなる。

-完-